

ドン・ジュアンに観るバイロン像(7)

楠 本 哲 夫

‘One Dies! Alas! the living and dead!’

《Don Juan》の冒頭の六つの Cantos (篇) に描かれた、通性の幻想的世界の中へ、Lambro がもち込んだ harsh masculine world 荒っぽい苛酷な＜男の世界＞は、(我々読者が)嵐の海洋から、中欧そして ^{ボルガ}Volga 河の凍てついた河岸の戦闘的焦点へと 移行してゆくにつれ 除々に、その感動と昂奮を高め 盛り上げてゆく。

ドン ジュアンの現段階の考察において、この苛酷にして無情な＜男の世界＞は 最終的に、いや、ほとんど究極的には、＜力＞が＜英知＞と＜愛＞の双方を制して 勝利を収めるという 重要な問題を孕んでいる。

だがこのことは——作家としての Byron にとって さほど 不運な、そして悲惨なものではないであろう、もしも彼がみずから対して＜力＞のテーマを蒐集することができていさえしたら、もし彼が＜彼自身の力＞、いや、彼自身＜賦与されていた力＞＜闘魂＞を 誇り高く行使したならば。

しかし、嗚呼！ むき出しの、裸の、非合理的な力のみ行使でしかないならば！ 冒頭の第四カント までの、あの、＜むき出しの、非合理的な愛＞のみでは、いかにも、完全を期すことは 覚束かぬほど、困難なほどに 不十分なテーマでしかありえなかったのである。もっとも バイロンは これを沈

着に 処理してはいるものの。しかし＜むき出しの、非合法的な愛＞にはそれ特有の、深い破壊的諸の面のみならず、深い、創造的 諸の面も 兼備している。そして Byron が Napoleon や Caesar を 理想化し得たような、そんな時代は もう とっくの昔に過ぎ去ったものとなっていたのである。

ゝ 1819年も終わるころのバイロンの手紙や 日記は、そのころの、募りゆく彼の心の、幻滅を書き綴っている。つまり、＜愛＞について、＜政治＞について、—（この地球の、より使い古した部分としての）ヨーロッパ大陸そのものについて募りゆく＜幻滅＞ を書き綴っている。そして、このとき バイロンは新天地としての南米に移り住むことすらを真剣に考えていた。

募りゆく幻滅という身にふりかかる火の粉を、払うべく、 バイロンは、その頃、いつものように、多くの場面で 同志と共に、あるいは敵に対し、敢然と挑戦し続ける。——即ちマレー及び 彼の結成する‘委員会’と共に、あるいはグイチョリ伯爵に、刃向って、あるいは、テレーザと共に、そしてオーガスタの為に戦い続ける——

先ず、《Don Juan》を駄馬としてでなく＜駿馬＞として 世に出すために一膚ぬぐうとする Marray 及び＜Don Juan 発刊のための委員会＞と共に悪戦苦闘する。——1月19日付の、Hobhouse 及び Kinnaird に宛てた手紙には、“《ドン ジュアン》は‘完全な 駿馬として誕生させる、是が非でも、そうする決意である。さもなくば 駄馬として葬るつもりだ。”と意中をのべている。——

次にグイチョーリ 伯爵とは、テレーザを どちらが 占有するかを めぐって その熾烈な戦いを 挑みつつ、その意中を 姉オーガスタに 7月26日の手紙で 書き送っている。

そしてテレーザと共に グイチョーリ伯爵からの離脱、精神的独立のために戦い、その意中を8月23日付のホブハウス宛の手紙の中でのべている。

また姉オーガスタには いつまでも変ることのない愛を誓い合う手紙を 5月17日付けで、最も激しく、最も情熱的に 書き送っている。—— “<去るものは日にうとし>と人のいう<離別>は、 <空白>は、—— 哀しいことだが—— 弱き情熱は、これを滅すが、強く、たくましい情熱は これを受けいれ 肯定し続ける。 あゝ、姉上、貴女への 僕の激しい情熱は、貴女への思慕は 情念は、あらゆる情熱、あらゆる愛情と融け合って一体となったものなのです—— 益 強化されてゆきます、 だが それは僕を破壊するでしょう、やがて—— 僕は僕の身体的破壊のことを言っているのではないのです、というのは、僕はこれまで、ぎりぎりまで耐えてきて そしてなお、もっともっと耐えることのできる人間なのですから。僕はあらゆる僕の思想、感情、希望、の絶滅のことを 言っているのです。”

だが バイロンは‘追放’による、最愛の姉、オーガスタ との<生木を裂かれる如き別離>という失意のさ中であってすら《ドン ジュアン》のもつ antitheses* を、バイロン独得の、すべての詩句、 いたずらなウィット 警句 諷刺で 見事に、巧みに、手練の技で弁護することが できるのである。

つまり——

* antitheses 対照法（修辞）一つの文の中で、意味の反対の章句を対照的に置く法。
処理する
 man proposes, God disposes.

バイロンは《Don Juan》の< antitheses >—対照法— について 8月12日付の マレー宛の手紙に 次の如く 書き送っている。

“僕の《Don Juan》の中で fun と gravity <気まぐれにして、おもしろいこと> と <生真面にして 重大なこと> が 矢継ぎ早に 続出する antitheses に 対して、———この詩風は バイロンが 追放後、イタリア

において 従来の《Childe Hrold》の、〈あの黒い憂愁にして 華麗なる〉詩風に行き詰まって後、ottava rima^{8行 連}を 駆使して〈ユーモアと諷刺を交互に、あやつり ナレーティブな、口語体、お茶の間閑話〉風に 新天地として開拓し、《Beppo》^{ペポウ}において、見事に 開花させ、以後、《The Vision of Judgement》^夢、《Don Juan》^{ドン ジュアン}と続き 一大諷刺詩人として 大成した 詩風である—— “反駁した 君の友人 C [ohen] に お答えしよう。 つまり僕の 返答は こうだ”。

‘fun と gravily との antitheses 対照法を使用する場合 gravity〈真剣な重大事〉は——少とも、それが意図しているのに—— fun〈気まぐれで、おもしろいこと〉を^{たか} 昂めゆくものではない’ かの如く C 氏は 述べているが、それは ちがうよ。

バイロンは 次の如く、C氏の metapho 隠喩に反論して次のように 書き送っている。‘一われわれは 絶対に 同時に 焦がされ (scorched) 且つ、ずぶぬれにされる (drenched) ことは ありえないのだ’ とC氏は 僕の antitheses を 皮肉るが、彼の経験は まことにお目出たい、happy なものだったのだ ね。

彼にきいてみてくれ給え。 つまり、—— scorching と drenching についての 次の質問についてね。 彼は^{クリケット} cricket の ゲームを play した経験はもたないのか ？

灼熱の天候の中を一マイル歩き続けた経験はないのか？

彼の目に、彼の頭に 照りつける太陽の直射を^あ浴びて、それも 真昼間のことだよ、海を泳いだ 経験は ないのか？ (——そんなとき 大洋のあの すべての白波、飛沫^{しぶき}も 涼を入れてくれることはできないだろうよ。——)

彼の魅力的な愛人に紅茶を手渡すときに、紅茶皿から 彼の睨丸に 暑い^{・・・}の

をこぼして南京ズボンに濡らして、肝を冷やす大恥をかいだ経験はないのかね？

あまりにも煮えたぎる ^{あつ} 熱いバス、^{浴槽} タブから 思わず彼の足を曳きずりだして自分の目と ^つ 付き人を ^{びと} あしざまに罵った経験はないのかね？

淋病を患って 注射をうけた経験はないのかね？

^{ただ} 潰れた尿道を通して 排尿した経験はないのかね？

トルコ風呂——あの大理石のように冷んやりした、^{シャーベット} Sherbet (氷菓) と ^{ソドミー} Sodomy (男色) の ^{パラダイス} paradise 天国 ——をたのしんだ経験はないのかね？

聖 ^{ジョン} St John のように 煮えたぎる大釜にそして また、あるいは hell 地獄の硫黄のにおいの寄せくる波の中に つかった 経験はないのかね？

“これらの質問をC氏に きいてみてくれないかね”

バイロンは みずから 自負する ^{アタバ} ottava rima の ゆったりとした、こっけいな、諷刺精神と ウイットに 富む詩風に対して、とやかくの、いっぱしの、おざなりの、反論、とりわけ、その特色とする ^{対照法} antitheses に 軽々しく 批判した Cohen に向って、小気味よく 揶揄 して 完膚なきまでにたたきつけている。あくのつよい Don Juan の作品は 実に バイロンの二元的性格をみずから 自画像として 力強く 世間に訴えたかった バイロンの 執念の creation 創造物 なのである。

最後に ここで＜イタリア的自由＞が ^{うた} 謳われているので、バイロンは ^{カーボナリ} Carbonari 炭焼党 を支持することにより イタリア的自由と 手を取り合っ

て それに没入して、没我の境に入らんとしたのである。

その当時の ^{炭 焼 党}カーボナリは 権力闘争であり バイロンは これに とても同情して 執心したのである、 もっとも バイロンには いささかの 個人的野望もなかったのであるが—— だが、ここで 再び彼は、 ひどく共謀者たちの、無感覚と憶病さに失望し 気落ちさせられるのであるけれども。

美的感覚を揺さぶる、そして センチメンタルな、多情多感な＜ハイディーの島＞から、かの戦慄的、権力闘争の＜イズメールの攻囲戦＞へと 展界の移行が 華麗な筆致で描かれてゆく。

この牧歌的場面を映した^{くだ}条りは 一つのお祭り騒ぎから始まり お祭り騒ぎで終わる。即ち、冒頭の洞窟にもちこんだ、フライにした卵、フルーツ、蜂蜜、そしてピラフ、あらゆる種類の肉、サモス島及びキオスのワインの、なみなみと入ったフラスコ、が用意された婚礼式場まがいの饗宴が ^{ラムブロー}Lambro の館でのシーンとして 映し出される。

このテーマは詩聖ホーマー的筆致である。そして最終的歓楽のシーンは まさに ホーマー的 瞬発的一気呵成の感情の激発にみち溢れた描与として、迫力をもつ。

このとき ごちそうの数々は 殺戮を意味し、^{いのち}命は 結果的に ^{つな}死へ連がるものである。 ハイディーが ジュアンを 敢て 洞窟から父の館へと連れ込んだのであるが、それは、彼女の父 Lambro が既に死んだ という誤報のゆえ だったのである。

ハイディーの父 ラムブローは 実は生きていて元気だったが その館では彼の生存のことは気付かれていなかった。 死んだものとして不問に付されていたのである。

＜死＞— ‘あの、うす気味悪い大食家’ (xx, iv) が 今にも ジュアンを^{もてあそ}弄ぼうと試みつつあったのである。しかし——先ず ジュアンとハイディーは饗宴^{うたげ}が終わり、招かれた客が一人一人立ち去っていったとき 眠ることを許されるのである。この二人の安らかな眠りのさ中にハイディーは悪夢にうなされる。そしてその悪夢から ハイディーとジュアンは目ざめ、彼女の父 ラムブロ と対決するのである。

うとうととまどろむ 快い、ぜいたくな眠りの世界の歎きは たちまちにして 暴力の^{ちん}闖入へと爆発する。ジュアンは抵抗するが、血達磨にされ ラムブロの 12人の配下によって たちまち うちすえられる。

ハイディは脳出血をおこし 2週間で 生命を絶つ。 “彼女が児^{はら}を孕んでいた” (IV, Ixx) ということは、この ‘哀れな唄’ に添えた、単なる、軽い、どうしてもよい挿話なのであるが その筆致は the Fall of Man (原罪, Adam と Eve の原罪) 症候群を意味したにすぎないのである。即ち、その子、ハイディの孕んだ児は 美しい、無垢な、 “罪なき子として晴々とこの世に生れ出てよかったのに” ——いや、あるいは、その MS、バイロンの《Don Juan》の生原稿を読むと ‘a child of beauty, though of sin’ ——とかかかれているので、おそらく、この詩想が より、バイロンの考えに近かったものであろう と思われてしかたない。

バイロンは ^{おお}寛らかな 慈悲深い コスモポリタンであり、罪の子を、罪の子として罰し葬り去ることは 決して しないだろうゆえに。

だが、運命の神は意地悪く、そうは事を運ばなかった、裁決しなかったのである。この美しく生れてよい、曙光を浴びて 祝福されて しかるべき出生を その生命を 絶ち切っている。

一方 ジュアンは 生きて ‘血の通った、人間商品’ としての生涯を歩み続けることになる。 ラムブロの配下の船乗りたちは（海賊の首領としてのラムブロの配下のものたち）はこの乱闘の場より 直ちにジュアンを海岸へと急ぎ運ぶ、そして——

‘and under hatches, /They stowed him,
with strict order to the watches’ (IV, i)

そしてハッチの下に 彼を閉じこめ
厳重な 監視を命じ……

注目すべきことは ジュアンが これから先の人生航路に いかに^{わな}罠を仕掛けられて 情け^{なさ}容赦もなく 苛酷^{かこく}な生を歩みゆかねばならぬのか、 その相^{すがた}をじっと見守りたい。

ジュアンの 辿ってきた道 ——罠をしかけられ ^{もてあそ}弄 ばれながら。
ベッド、押込、ボート、洞窟、ラムブロの館^{やかた}、そして又船、奴隸市、Seraglio、
（トルコの後宮）そして又ふたたびベッドへ——

そのめまぐるしく、転々として移りゆくジュアンの舞台、— それがジュアンの流転^{ぎま}の生き態なのである。

今、奴隸として売られてゆくべく ハッチの下に積み込まれ これからのジュアンの旅は コンスタンチノーブルへと向かうのであるが、豊かな コミック（喜劇）風のタッチで 描かれてゆく — いや、それは 悲劇なのに。

ジュアンは 今 奴隸として the shores of Ilion (Ilion は 古代ギリシア^{イリオンの岸} の Troy 名^{イリオン} トロイ) に碇泊中の船倉から じっと窓外を見いる。そしてそこには
‘many a hero’s grave’ — 昔の多くの勇士の眠る墓碑銘を刻んだ墓——がジュ

アンの目を射とめる。(irony アイロニ、皮肉、諷刺 には ちっとも強調は要らぬものだ。 淡々として唄えば それでよいのだ)

ジュアンの仲間の奴隷たちは 謂うなれば彼ら自身の座長によって シシリ一島での 契約の途中の間 ラムプロに売られた 一団のオペラ歌手たちなのである。

バイロンはこの^{くだ}条りで、(《the ^{トロッド}Troad》の描写の場合、 かつての彼の^{レバンの遍歴} Levantine pilgrimage を描いた如く) イタリアでの諸の経験を綴っている。

『カストラート歌手 (去勢れた男性ソプラノ歌集)、プリマドンナ、うぬぼれの強い、美しい若者たち、去勢された道化役者の Raucocanti のとどまることをしらぬ エゴイズム——鎖につながれていても——などなど、ジョークをまじえて しっかりと the point of impotence 性的不能の点が 強調されている。 彼らが Sablime Porte に 近づくにつれ Raucocanti は 彼のもっとも嫌われているライバルの テノール歌手に鎖で つながれ、そして ジュアンは ‘一人の Bacchante blooming’ ——花も盛りの、酒神バッカスの巫女の顔つきの、ロマニョールという女——と足かせをかけられる——それがジュアンの次の進展の相、^{すがた} ‘強制される情事の ‘先触れ’ なのである。』

ここで この物語の中に挿入された < ^{名声}fame > についてのスタンザ (IV, xcvi-cxii) は< ^力power のテーマ>を 個人的 私的意味で バイロンに しっかりと 結びつけている。 その条りの談話、おしゃべりは 上気嫌で続く、そして バイロン流に 全域にわたるのであり、最初は 先ず、愚弄、揶揄するごとく続いてゆく——

the publisher declares, in sooth,
Through needles' eyes it easier for the camel is
To pass, than these two cantos into families (IV, xcvi)

[I] recollect the time when all this cant

Would have provoked remarks—which now it shan't (IV, xciii)

まことの話、 出版屋は はっきり言う
 ラクダが針の目を通り抜けるほうが より易しいと。
 この二つの ^{カントウ} 篇 が家庭に入りこむよりもね。 (IV, xcvi)

それから けんつくを喰^{くら}わす口調で

思い出すよ ^{空念仏} cant のすべてが
^{ぶつぎ} 物議を醸しだしたかもしれぬときのことを
 だが、もう、——そうでなくなるだろうよ (IV, xcvi)

——それから悲哀をこめた ^{しらべ} 調で 唄う——

Whether my verse's fame be doomed to cease,
 While the right which wrote it still is able,
 Or of some centuries to take a lease;
 The grass upon my grave will grow as long,
 And sigh to midnight winds, but not to song (IV, xcix)

わが唄の名声が 墜つる日くるとも
 それを綴る右手の 利くかぎりはお
 世々にわたる その権利はつづく
 わが墓の上の 草は萌えいで
 真夜中の風に 唄わずとて溜息はする

—then judicial:
 And so great are nothing more than nominal,

And love of Glory's but an airy lust,
Too often in its fury overcoming all
Who would as't were identify their dust

From out the wide destruction, which, entombing all,
Leaves nothing till 'the coming of the just'—
Save change: I've stood upon Achilles' tomb,
And heard Troy doubted; Time will doubt of Rome (IV, ci)

かくて 批判するごとく——

偉大なる名声も	虚ろな ^{うつ} もの
栄光への愛は	淡き空しき欲望
あまりにも ^{たけ} 猛り	いわば自ら永眠 ^{ねむり} ゆく土を
確認したがる	すべてを圧倒して
すべてを葬る	汎き破壊の外に
何一つ残さぬ	正義の倒来の時まで
有為転変あるのみ	私はアキレスの墓に立ち、聴く
トロイの疑われるを、	トロイの疑われるを、 ^け ‘時’はローマも没すだろう

A broken pillar, not uncouthly hewn,
But which Neglect is hastening destroy,
Records Ravenna's carnage on its face,
While weeds and ordure rankle round the base (IV, ciii)

——次に、De Foix の記念碑を描写して 微妙に写實的に 唄う

こわれた柱は 異様に切り倒されたのでなく

無視的やり方で 破壊へと急ぎ
ラヴェンナの虐殺を その表面に記し
一方、雑草と排泄物が 基底の回りで^{うず}疚き悼む

—with a return to the personal in what is the most powerful apologia
Byron ever made for his life and art:

If in the course of such a life as was
At once adventurous and contemplative,
Men who partake all passions as they pass,
Acquire the deep and bitter power to give
Their images again as in a glass,
And in such colours that they seem to live;
You may do right forbidding them to show 'em,
But spoil (I think) a very pretty poem. (IV, cvii)

最も力強い弁明の中で バイロンは わが身をふり返って 己が生涯と芸術
へと進みゆき 唄う。

冒険にみち しかも 冥想深き
その生き^{さま}態の中に もし 人が
あらゆる感情のおこるまま 流れゆき
深き^{にが} 苦き 力を得て グラスの中でのよう
その感情のイメージが 生きるが如き^{いろどり}色彩で
映し出されるのを 絶つのは正しい
だが、僕は思う、 美しい詩はスポイルされるもの

《ドン ジュアン》の the first Act (前段) のテーマは＜食うこと、 食われること＞ なのである。 the second Act (後段) のテーマは ＜売ること、 買うこと＞* なのである。 イスタンブールの奴隷市場での奴隷売買のシーンに晒^{さら}されて ジュアンは 自分が 一人の英国人、 ジョンソンという名前の a soldier of fortune 《利益、 冒険のためにはどんなところへでもゆく》＜冒険軍人、 血気盛んな冒険家＞の側にいるのに気付く。

A man of thirty, rther stout and hale,
With resolution in his dark grey eye, (V, x)

30才の男 とても頑丈で 元気に溢れ
その濃き灰色の目に、 決意の色を湛えた

*＜男は 事實は、 女の財産の一部となるのである＞ と1820年1月31日付で R. B. Hoppner に宛てた手紙の中で イタリアでの彼の生活、 キャバリエル・セルバンテ＜随身の騎士＞のことを 述べている。 第5篇は1820年11月脱稿。

彼 ジョンソンはジュアンと二人がこれから買われてゆくべく待っているとき、 ジュアンを遇する人に教育的談話へと導いてゆく。 彼は ＜ハイディーと自由＞を失ったジュアンの哀しみを 不憫におもう。 だが彼はジュアンにむかって 微妙に 想起させる、 即ち——ジュアンのハイディーへの愛は 生活がもち来る多くのものの中で、 その愛自体が一種の奴隷の相^{すがた}だったのだから—— ということを。

‘Love’s the first net which spreads its deadly mesh;
Ambition, Avarice, Vengeance, Glory, glue
The glittering lime-twigs of our latter days,
Where still we flutter on for pence praise.’ (V, xxii)

致命的^{あみ}網の目を展げる、愛 先ずありて
野望^{どん}、貪欲、復讐、栄光、そして 妄執
きらびやかな 後の生涯^ひは ライムの小枝で
なお、^{ぜに} 金を、栄光を、求めて おどるのだ

‘For pence or purchase’ は、trap (わな) のモチーフ から purchase (購入、獲得) のモチーフへの転調の効果を果たしている。

しかし バイロンは この^{くだ}条りでの転調、移行を そのまま置き去りにすることに満足しないで eating (食) の テーマをも導入する。この奴隷商人は、ジュアンとジョンソンを 去勢された^{セラグリオ}後宮に仕える黒人に売りつけて、食事するために 帰宅する。

バイロンは ここで 沈思する。

‘彼の食欲は 充分旺盛だったのかしら ?’ つまり、彼の ‘良心’ は そもそも みずからにむかって 奇妙な問いかけをすることはしないのだろうか？
＜どこまで ^{人肉} flesh と ^血 blood を売ることは 許されて いいのかな？＞と 自問自答することはなかったのかな と。

I think with Alexander, that the act

Of eating, with another act or two,

Makes us feel our mortality in fact

Redoubled...

(V, xxxii)

僕はアレキサンダと共に 思うんだが
＜食＞の行為は その他の一、二の行為と共に
事実 我々に＜人の道＞ が それゆえに

強化 倍加されゆくを 実感させる……。

バイロンの とても尊敬した 偉大な人と同名の このく荒っぽい 道学者
 者><血気盛んな冒険家>ジョン ジョンソンが実にここで示唆しつつあること、それは——衣食足りて榮辱を知る。ハイディーの島でのジュアンの たのしかった、幸福な 愛と 饗宴、そして ラムブロの奴隷売買の、それゆえの起源、との係り合い、関係なのである。さらに、これを超えて 人間界の交流を支配する<諸の商慣習法>との 関係なのである。 先ず、食うこと。食うか、食われるか。 それから 売ること、買うこと。

‘Tis pleasant purchasing our fellow-creatures;
 And all are to be sold, if you consider
 Their passions, and are dex’rous; some by features
 Are bought up, others by a warlike leader,
 Some by a place—as tend their years or natures:
 The most by ready cash—but all have prices,
 From crowns to kicks, according to their vices. (V, xxvii)

仲間を買うことは ゆかいなものだ
 そしてみな売れるんだ もし情熱を考え
 器用^{さば}に捌けば、あるものは目鼻立ちで、
 買われる。あるものは、好戦的リーダーから、
 あるものは地位で—その年令と性格次第で、
 多くは 即^{キャッシュ} 金で ——皆 値^ねぶみされ
 ピンからキリまで 底^{きず}しだいだね

このスタンザは、これに ひき続く 奴隷売買行為のエピソードを要約して

いる。

サルタン
Sultan の妃 —— 彼女自身 バイヤーだが、—— ジュアンと同じく
その目鼻だち（容貌）の美しさによって 買われてきた身、そんな境遇で、^{かこ}囲
われている第四夫人なのである。

一方ジュアンは その後 次々と リーダー達 Lascy や Souvaroff によっ
て買われ、 ジュアンに与えられた立場として女帝 Catharine への性的奉仕の
ため 彼女の手で 買われてゆくのである。

かくして このスタンザは これに続く めまぐるしい action の ^売buying-
^買selling のエピソードを 要約している。即ち、ジュアンが買われた ^{サルタナ}Sultana
—— ^{サルタン}sultan の第四側室——は、彼女自身バイヤーでも、しかも、それなのに、
ジュアンの＜美貌＞に、謂うなれば買われるのである。一方ジュアンは、やが
て、リーダーの ^{ラーシ}Lascy や ^{サウバロフ}souvaroff によって ^{性的奉仕}sexual services と交換に与えら
れた立場でロシア女帝 Catherine に買われてゆくのである。かくしてこの第5
篇の ^{後宮}Seraglio のエピソードは、現にそうである如く、過去、未来のあらゆる
詩の、一種の結び目、渦を形成し、しっかりと織られている。

バイロンは このような 要点の繰返し技法を好み、それを再度、この詩の
最後の、＜Norman Abbey＞の^{くだ}条り でも 用いている。

この館は ^{やかた}その前の そして その後の、いくつかの 仕掛けられた ＜わ
な、落し穴＞ の迷宮的コンビネーション であり、ジュアンの ^{すがた}受難の相、
——つまり、一連の、洞窟、回廊、押込み、ベッド、要塞、牢獄、の連鎖なの
である。それは Golden Horn* に堂々と高く浮かぶ 奴隷船ともみられる。

ボスポラス ボスフォラス インスタンブル
* Bosphorus (Bosphorus) 海峡にある入江で Istanbul 市の港になっている。

それは糸杉に^{いとすぎ}縁^{ふち}どられており、また 墓地でもある。ジュアンが 最初に
感知したことは 非人間性、死の如き静寂さであった。

ここで 私達に想起されることは 第4、5、6篇で いずれも 同一步調

で 密室恐怖症的ベネチア劇が描かれてゆくことである。

《The Two Foscari》(フォスカリ父子)の中での 大きく張りめぐらされた蜘蛛の巣に捕えられた あやしい光を放つ蛸は <後宮の愛の力>の中でもつれ もがく ジュアンの姿を意味しているのかもしれない。 ジュアンはここでは<愛の犠牲者>、愛の血祭りにあげられた 犠^{いけにえ} であることが 強調されている。

ジュアンの 男性^{ノボ} そのものが—— 去勢された男、宦官 Baba が ジュアンに 女の衣裳を着せ 彼の^{セラグリオ} 辜丸をぬこう と迫るとき——危くなり威嚇されるのである。 Selaglio (トルコ回教徒の後宮) は レスビアンの世界なのである。そこでは、ジュアンは 彼の 雌雄同体的美形が^{ガルベヤズ} Gulbeyas ——サルタンの第四側室——の性的煽情嗜好を やんわりと くすぐるのである。

^{ガルベヤズ} Gulbeyaz の私室を護る gigantic portal (巨大な花卉) は 性器 そのものに 他ならぬのであり、ジュアンを、——割れ目もつ孤丘での性交から洩れる精子、スペルマの^{したた} 滴り として——曳^ひきずり込むのである。即ち、そこでは ジュアンの 個我は Sexual Garments (性衣) の<貪^{どんらん}婪な うねりゆく^{シャツ} 敷布>の中にすっかり 埋没し 失われてゆくのである。それは 男 それとも 女体 ?

Some find a Female Garment there,

And Some a Male, woven with care.

あるものは そこに 女体の衣裳を見

あるものは男衣を見る 丹念に織りなされた

この性的 ジュアンの葛藤が クライマックスを迎えるのは カントウ (IX) 第9篇での address to the throne (カザリン女帝へ話しかける 場面) である。即ち、これは、the apotheosis of vulva (陰門神聖化) である。バイロンの〈ドン・ジュアン〉の全篇を通じて バイロンが描出しようとした〈愛〉のテーマを さらに精査するとき おそらく 浮刻りにされるであろう コミックなタッチの extrapolation (外挿法, 補外法)* なのである。

* extrapolate: calculate from the terms of a known series

‘Round me flew the Flaming Sword’

≪Don Juan≫を 論ずるにあたり この詩篇の〈夢〉の面から 始めたが ≪Dream〉夢は そのものの中に 二重の内包をもつ。人間は夢を生きる。つまり 原型的潜在世界を生きそして同体にも、夢の中で生きる。つまり 自身の個我的意識的、欲望、推進力、要求の幻想的世界の中に生きる。

これは 第一^篇cantoの世界であり、‘ここには暗黒はない、この、さえずりの世界に暗黒はない、ドナ・イネス と ドナ・ジュリアの世界である。ジュアンは あまりにも 純真無垢、無邪気、あまりにも生まれたままの自然児そのもので この俗世に所属しないのである。

しかし物語りが ハイディの島から^{後宮}Seraglio, 去勢の世界(中性の世界, 男女共同体の世界)へと、さらに^{後宮}≪Seraglio≫から≪イズメールの攻囲戦≫と、さらに≪セントピータズブルグ≫及び≪ロンドン≫の腐敗的社会へと進みゆくにつれ ジュアンの無垢は(それは主義の問題でなくて<生きる<こと>, 存在>の問題だが) 序々に腐蝕されてゆく。the Siege (攻囲戦)のはじめでは ジュアンは まだ 子供なのである。

And here he was—who upon Woman's breast

Even from a child, felt like a child...

(VIII, liii)

そしてここへ来て——彼は女の胸で

^{おきなび}幼日すでに感じた あの無垢な子供を

ジュアンは やがて ‘ある^{へだた}距りを^{おいて}’ 残忍を憎み始める。彼が既に経験した、難波船での、ラムブロの配下の手で、奴隷船での、そして^{後宮}seraglioの中での＜暴力＞は、彼に腐敗的 墜落的効果 影響を及すのである。このことは ‘純粹無垢な、もって生れた自然の’ 謂うなれば 道義を必要とせぬ natural なものによって 仕掛けられる危険を孕んでいるのである。— Blake の 謂う ‘組織されな^い無垢 無邪気’ は ‘無知’ と謂われたほうがよからう。

ジュアンは 衝動の所産であり 唄うべく生れ^い出でし児’ であり もっぱら ^{sensaion}‘感 覚’ をよろこび たのしむのである。いかにも それは 一瞬にして 歓びと温情の感覚を形成するが (バイロンは この ^{sensaion} の語を力説 力強する) だがしかし それは、次の瞬間、変り得ることは可能なのである。＜心＞はコロコロ 動いてゆく。だから ココロと言う。それが sensation なのであり、バイロンにとってその瞬時に 転りゆく感覚が最も貴重なものとして尊敬し育まれ、しっかりと胸に抱きしめれたのである。いつもの場合も、変ることなく。それがバイロン文学である。

And afterward, if he must needs destroy,

In such good company as always throng

To battles, sieges, and that kind of pleasure,

No less delighted to employ his leisure;

But always without malice: if he warred

Or loved, it was what we call ‘the best

Intentions', which form all Mankind's *trump card*,

To be produced when brought up to the test.

(VIII, xxiv-xxv)

だが 後で彼が 破壊を必要とするとき
 戦闘に攻囲戦に、そして同様に 暇^{ひま}をたのしむ
 あのよろこびにも つねに群に集いくる
 そのような 親しい良き仲間の間にいても。
 だがつねに 悪意はもたぬ。もし 戦い、
 そして愛したときも ‘最たる善意’ で行われ、
 それがまた人間の ‘切札’ を形成し創られて、
 試練の場へともたらされた

《Don Juan》は 根本的に その基底において 最も道義的詩なのである。事実、バイロンは このことを この作品の出版者マレー及び 其他多くの親友たちに 主張し強調したという点において 真剣だったのであり、＜真実＞以外の何ものをも 述べようとしたものではなかった。バイロンの述べたかったことは＜真実一路＞の、みずからの生き態^{さま}を ドン・ジュアンによって書き遺^{のこ}し、後世に伝えたかったのである。ゆえに ドン・ジュアンへの執念は 道義的に消されようとしては、その炎は 踏みにじられても 燦^はぶり続け
 また メラメラと 燃え熾^さがりゆくのであった。吾人はそこに バイロン魂を垣間見るのである。コスモポリタン バイロンが 人を愛し 世を愛し 人生を愛し 滋^{いつく}しんだ その豊かにして あたたかい 人間愛を 憶うのである。

《Don Juan》は バイロンが 自分の心の血のにじむ記録として残したものである。バイロンの ^{情熱}passion の記録なのである。移りゆく passion の偽わら

ざる記録なのである。人の置かれる^{もろもろ}諸の立場において、その弱さ、そしてその紆余曲折を分析するとき、それはとてつもなく複雑で広範囲にわたるもので Paradise Lost (失樂園)*¹、いや The Excursion*²、いや、さらに、The Faerie Queene*³ によって我々が汲みとることができるものを遙かに超える、凌駕するものなのである。

*¹ 失樂園 は Milton の叙事詩 (1667) 全12巻よりなる。人類の始祖 Adam と Eve の墮落を中心主題とする人間の原罪と神の摂理をとく

*² Excursion (逍遙篇) は Wordsworth の長詩 (1814) 9 巻からなる。自伝的色彩は濃いが最も覇気にみちた作で、深い内的経験や洞察を閃めかす。冗漫で教訓多く Byron は 'drowsy poem' と評している。

*³ Faerie Queene (神仙女王) Edmund Spenser の叙事詩。この大作に20年の才月をかけたが未完成。BKSI-III が1590 BKsIV-XV が1596 出版。(BKs VII は、断片として死後1609出版)

神仙女王 Gloriana は Elizabeth 1 女王を表す。

正と悪、罪と救いの相剋を基本的テーマとする。

興味の中心は 女王によって派遣された12人の騎士の挿話にあり、華麗な絵画的描写と音楽的諧調には Keats も 驚嘆している。

この詩形は J. Thomas, Keats, Shelley, Byron, Tennyson によって襲用された。

原型的夢の世界の中の主要な群像の中で、ジュアンの占める位置は、彼自身が the Magic Child (魔法の子)、Inez—^{イネス ジュリア ハイディ}Julia—Haidee は the Anima 症候群的魂、(即ち the Virgin Mother, Eve, Lilith* and Mary,) ^{聖母マリア イブ リリス メアリ}なのであり、^{父なる神 魔法使 ドン ホセ ラムブロ サルタン}一方, the Father, the Wise Old Man が Don Hose, Lambro, the Sultan ^{ジョンソン}そして Johnson によって 代表され 描かれているのである。

* Lilith は 子供を襲う魔女。(ユダヤ伝説では) アダムの最初の妻。

これから登場人物が この世の '腐敗 墮落した 潮流' の中で 波に弄られてゆくのであり、それは人間の見る自昼夢なのであり、かつ、目覚めて見る、とりつかれた激情であり 野望なのである。

‘Men and bits of paper, whirled by the cold wind
that blow before and after time’

‘流れゆく時の 前を後を吹きゆく
冷たい風に舞い渦く^{うずま} 人の子と幾片の紙切れ’

その渦巻き 旋風の中で 生き残るべく 挑む者として ジュアン[・]の父は
明らかに 不適格者[・]であるのは サルタン[・]が そうであるのと同じなのであ
る。 Lambro と Johnson は 極度に適格者[・]なのだが 彼らの能力は 無理解
と野望という欠陥によって、その真価が<きずもの>とされねばならぬ。

イネスとジュリアとハイディは 皆 ジュアンを母性的——処女的愛情をも
って扱い、ジュアンに迫る。そしてその愛が微妙に、利己的なもの ‘storgous’
(母性愛的) な無理押しの強要として ジュアンに迫る。

だから ジュアンは 謂うなれば 一個の<あやつり人形><傀儡>であり
運命という一指によって、そのなすがままに吹かれる笛なのである。 ゆえ
に 思うがままの音色を奏でつつ 興到れば吹き 興冷^きむれば 吹き止められ
るのである。

ジュアンは腐ってゆく。 だが そこにはすこしは 生育してゆく可能性は
残されている。 ジュアンは彼の経験からは 何一つ学びとてはいない。 —
— ただ、一匹の虫けらが 生きてゆく生き態の中から 学びとるようにしか。

実験室の中に入れられ 迷宮 迷路で過熱された道は 避けるべく、又、電
氣的 ショックを蒙る入口は 避けるべく 知覚するよう学び得たに過ぎない
ので 其他一切のことは 何一つ 学びとてはないのである。

《The sieze of Ismail》(イズメールの攻囲戦) が第7, 8カントウの大部分を占めている。恐怖の光景が 荒天の海の難破の場面の如くに 迫りくる威力を示しながら、記録的描写 典拠 によって 迫真性を示しながら 明確に配列され 述べられてゆく。

第7カントウの終りで《The Sieze of Corinth》(コリントの攻囲 VIII, i-ii) 及び《Childe Harold》(チャイルド・ハロルド III, xxi-xxvi) の the Eve of Waterloo (ウォータールーの夜景) を想起させる 夜の場面と共に 戦闘が描かれている。

バイロンは このような はらはらさせる場面において その描写に 最善の努力を払っている。それは あたかも 彼自身の在り方の織りなす、暫定的危機を脱出する^{きじ}生地が この場面で ^{カタルシス}catharsis (浄化作用) を見出す如き描出であり それは その抑圧された暴力が たとえば 大虐殺の場面及び いたいけない トルコ娘 ^{リーラ}Leila の救出 (VIII, xci-cii) という 憐憫の情の中に現れる のと 全く同一の筆致なのである。

^{リーラ}Leila は ‘二人の悪党のコザック騎兵’ によって まさに虐殺されようとしている。この場景が バイロンの お得意の主題 The comparison of men with animals (人間と動物との対比)* への展望を 提供している。

* The ‘Inscription on the Monument of a Newfoundland Dog’ バイロンのとても かわいがっていた ニューファンドランドの愛犬を葬ったとき碑文へ刻した文句が このテーマを述べたものとして 最もよく知られている。

matched with *them*,
The rudest that roams Siberia's wild
Has feelings pure and polished as a gem,—
The bear is civilised, the wolf is mild;
And whom for this at last must we condemn?

Their natures? or their sovereisns, who employ
All arts to teach their subjects to destroy?

(VIII, xcii)

……人間どもと組んで
シベリアの荒野をさまようた屈強な、この獣^{けもの}
宝石の如き洗練された感情をもち——
熊は文明化され 狼はおだやかに馴らされ
つまるところ 誰を責めるのか、このことで。
その習性をか？ それとも 支配者をか？
彼らは臣民が破滅することを 教えるべく
あらゆる術^てをつくすのか？

それは 一つの修辭的問いかけ？ 多分 そうだろう。 だが しかし 正
にかくの如き 余白的 註釈的コメントを たくみに 器用に 用いること
によって バイロンは 終始一貫 みずからの 喧騒な分野を 社会的 政治
的 倫理的冥想の全景へと 開拓してゆくのである。

Wise Old Man として、Ismail の hell 修羅場を導いてゆくとき John
Johnson の不適格性が この挿話の中で 見事に実証されている。 機転の利
く 主人公ジュアンは 二人のコザック兵に 丁度よいときに時機を得て 手
順を示したのである。 即ち彼が死体の山から その少女を救い上げたとき

Up Johnson came, with hundreds at his back,
Exclaiming—‘Juan! Juan! On, boy! brace
Your arm, and I’ll bet Moscow to a dollar
That you and I will win St George’s collar.’

(VIII, xcvi)

ジョンソンが通り合わせた 多くを従えて
そして叫ぶ——ジュアン、ジュアン、さあ、美少年、
元気を出しな！ モスクウに1ドル賭けるよ、
君と僕がセント、ジョージ大勲章が飾れるように

暴力、金銭、野望 のテーマが 突如、やさしい、ものやわらかな 瞬間的
救助という領域へと 押し入ってくる。ジュアンは みずから救った少女を
置き去りにすることを拒む。ジョンソンは ジュアンを うながす、せき
立てる。——

名声 感情 誇り 憐憫
‘fame と feeling と pride と pity の中から 一つを選択せよ’ と。

この場合の ^{アリタレーション}alliteration (頭韻) は その選択の厳しさを 強調している。

だが ジュアンは動じなかった。不動の心固く、^{リーラ}Leila が 無事安全な状態
に保護されて やっと ジュアンは ジョンソンと共に急ぐ。

ここで、このときだけは きっぱりと ジュアンは自己の主張を通す。自分
の意志通りに動く。ここで 想起されるのは かの the ^{ジャウア}Giaour のテーマであ
る。即ち それは当然のことながら この挿話の、この条りで ジャウアの罪
の意識が象徴され、蘇生してくるのである。《Giaour》のプロットを追う
かぎり、主人公ジャウアも この場に たどり着くとき 最早や 手遅れで
彼の ^{リーラ}Leila を救い得ないのである。——そう思えるのだが、ジャウアはトル
コへの個人的復讐の念を遂げるためにのみ心はやり、リーラの救助がそのため
後廻しにされ 保留されたのである。彼女は殺害された。そして ジュア
ンの余生は 哀しみと罪の意識にさいなまれ続けられるのである。Don Juan
の中のリーラの挿話が工夫、焼き直しされた点で バロンは この悲劇を改作
したのである。—— つまり それは 深層意識での、バイロン自身のドラマ
なのである。

かくて バイロンは 自らの罪の意識を追放し蘇生するのである。注目すべきは バイロンの若き日 巡礼の旅から 彼の心の中に ひょいと とび込んできた 罪悪感が、今の彼の書翰、彼の日記、彼の詩から 除々に消えてゆくのである。このことは 実に 注目に値する発見なのである。

もう一人の教父的人物、^{スワロウ}Souvaroff 元師は John Johnson を更に大規模にした如き人物であり、彼が ジョンソンの専門意見を Lambro の冷やかな知えと混ぜ合はせて、両者を宇宙的といってよいほどの、国際的 スクリーンに投影してゆくのである。

^{アリ パシャ}Ali Pasha は バイロンの描く Wise Old Men 中、最も、ぞっとする、せんりつすべき男であるが、文句なしに二枚舌をもつ、残虐性を具備する怪物である。彼には もう一つの completeness of evil (完全な魔性) という資質以外には 何一つ 備わっていないのである。

^{スワロウ}Souvaroff なる、もう一人の怪物も ただ個人的魅力として呼ばれてよい資質を備へる人物として描かれている。彼は Reade* 的、傑出して機知に富んだ主人公で、つねに抜け目ない、つねに有能な、つねに present au present なる人物である。

* Wayne Burns の、とても教訓的 Charles Reade: a study in Victorian authorship. New York, 1900 からの引用語

彼は Prince Potemkin から書翰^{かん} —— 軍史の中で、たしかに、最も短い書翰だろう —— Vous prederez Ismail a que ce soit'l に^{こた}応えて 現場に到着する。

この手紙を バイロンは the evil of war <戦争の悪>についての 彼の真

面目な談話（非戦論）へと導いてゆく。

‘Let there be Light!’ , said God, ‘and there was Light!’
 ‘Let there be blood!’ says man’ and there’s a sea!
 The fiat of this spoiled child of the Night
 (For Day ne’er saw his merits) could decree
 More evil in an hour, than thirty bright
 Summers could renovate, though they should be
 Lovely as those which ripened Eden’s fruit;
 For War cuts up not only branch, but root (VII, xii)³⁷

‘光よあれ’ と神はいい 光はあった
 ‘血よあれ’ と人はいい 海がある
 この夜の甘ったれ子の 命令は
 (というのは昼はその長所を見たことがない)
 1時間で 30の照りつける夏が
 復元しうるよりも、多くの悪を命じ得た、
 それはエデンに熟した果実ほど ^{こころよ} 快いものだが。
 戦争は枝のみならず根も ^な 絶つ からね

これは人間の諸悪の中で 最たるものについてのかくの如き信頼できるコメントであり、 真剣な思想家としての我々のバイロン評価を改むべくきつと役立つにちがいない。

バイロン自身の時代の読者にとって ナポレオン戦争を戦ったこと、そしてヴィクトリア、 エドワード、 ジョージ 時代における読者にとってイギリス帝国の国策、帝国主義として 戦争を追求し これに関与したことにおいて、バイロン ブレイク シェリー が とりあげたが如き態度は 文句なしに

戦争絶対反対 だったのであり 許すべからざるものであった。

<いかに、より快い><いかに、より詩的であるか>の課題、思考、黙想は
ワーズワス コウルリッジ、キーツの ひ弱な、 きゃしゃな もろき隠れ
家的 隠遁的 逃避的思想だったのである*。

* キーツは あまりにも若くして逝き 故にその後の思想の発展が いかになった
であろうかは 憶測の域を出ないので 除外しても よいかもしれぬ。

コウルリッジの場合、‘The taking of a city’での 彼の ^{反 動} reaction は 一考
に値するかもしれぬ。

バイロン自身、ワーズワスに対しては びどい口調で 思う存分 揶揄し
愚弄している。

‘Carnage’ (so Wordsworth tells you) ‘is God’s daughter:’

If *he* speak truth, she is Christ’s sister, and

Just now behaved as in the Holy Land....

(VIII, ix)

and annotates:

大量虐殺 は神の娘 とワーズワスは言う

彼が真実をのべるなら彼女は^{キリスト}の姉妹で

聖地における如く今も 振舞ったのだ

そして 註釈をつけ加えている。

But *Thy** most dreaded instrument

In working out a pure intent,

Is Man—arrayed for mutal slaughter,—

Yea, *Carnage is thy daughter!* (Wordsworth's *Thanksgiving Ode*)

だが神* の恐るべき武器は——

純粋な目的を行使しうる点で——

人間なのだ——相互殺戮のため着飾った

そうだ、大虐殺は神の娘だ

* 即ち、この thy (汝) は the Diety の意。これは多分、戦闘開始！ 武器を取れ！ と指令する Carter King at Arms によって見破られたほどの立派な殺戮への血統であろう。もし 率直にはっきりと発言する人々が そのような血統を発見すれば 果して どんなことが 言われたであろうか？

《The Prelude》及び 無比の敘事詩に対し Wordsworth への、そして《The Ancient Mariner》に対しての 偉大な Coleridge への 尊敬の念にも 不拘、非地方的問題即ち より大きな 広い分野に関するかぎり より広い 視界の関与する場において、 彼らが関与しようとせず 無縁な態度であり、即ち 彼らが 孤立し これに巻き込まれることを拒否した態度は 彼らを 愚かさへとゆがめ 目をそらしゆくのである。 もっと悪いことに 彼らが 移りすぎゆくショーについてコメントするべく 詩人として自らが要求される ときは もっと愚かである。

バイロンは コスモポリタンだった。より広い視界において より広い世界の視野に立ち これに関与した。 彼らは これに関与せず 回避した。ゆえに バイロンは 彼らを 背教者 裏切者と見なした。 この考へは バイロンが——彼らが 文句なしに、ヨーロッパの政治的、社会的問題に 精通しなかったのだというバイロンの基本的判断なのであるが（それが必ずしも正しかったと 容認する必要はないだろう としても……）

それにしても もっと いけないことに——バイロンは そう判断しているが——彼らの自己中心的考えが 彼らの同時代の、夏の人間の苦悩から 彼らを 遮断し 絶ち切り、絶縁させたのである。

Wordsworth の ‘Still sad music of humanity, not harsh or grating’
——つねに もの哀しい人間の音楽、それは耳障りでなく きしるものでもない—— という調べも バイロンの あの Ismail の、^{まさ}將に ^{いき}息を引取ろうとするものたちの、咆哮、かん高い叫び、罵声、の中では、水浸し、溺れ、消されゆくのである*。

* バイロンのここで強く意図する気持の真剣さは cxxxv スタンザでも再び明らかに 述べられている。

For I will teach, if possible, the stones
To rise against earth's tyrants. Never let it
Be said that we still truckle unto thrones;—
But ye—our children's children! think how we
Showed what things were before the world was free!

Children of the future Age
Reading this indignant page,
Know what in a former time
Love! sweet Love! was thought a crime.

できれば 教へよう いくつも石が
地上の暴君に^{むらが}坑って むくむくと括頭したのを
決して言うまいぞ 王座に屈従しよう——
だが君ら一子孫たちよ! 自由世界以前に

我らが 何を示したかを とくと考えよ！

そこには新約聖書のエコーがブレークの思想と結びつく

未来の時代の 兄らよ ！

この ^{いきどお} 憤りの頁を 読んで知れ

昔の時代には 愛、甘き愛！

それが 罪惡視されたことを。

ここで ^{スワロウ} Souvaroff なる人物へと 引返へそう。バイロンの画廊の中で 彼が最も興味をひくだろう。Ali Pasha は 若き日のバイロンにとって 困惑的 謎の人物であった。謂うなれば 小羊の下に かくれひそんだ 虎だった。

しかし Souvaroff は変装、偽装していない。彼は ずばり そのものとしてそこに立っている——そのままの ^{すがた} 相で。つまり人間の形態をとった ダイナミックな、律動的エネルギーの魂りなのである。バイロンはこの現場、イズメールを若き日に訪れている。そこでは‘風紀’なるものは きわめて 低劣な ^{さと} 郷であった。 ^{イズメール} Ismail はしかし、難攻不落に思えた。それなのに今は——

The whole camp rung with joy; you would have thought

That they were going to a marriage feast

(This metaphor, I think, holds good as aught,

Since there is discord after both at least):

There was (not) now a luggage boy (but) sought

Danger and spoil with ardour much increased;

And why? because a little—odd—odd man,

Stript to his shirt, was come to lead the van.

(VII, xlix)

キヤムプ全体が 歎びで 湧き立つ
 まあ、そう想像^{おもつ}てよかろう、結婚被露宴にゆくような、
 (この比喩は何かの眞実を伝える
 少くとも 双方^{たが}互いの不協音をもつゆえ)
 その当時 luggage boy は 小姓^{小姓} 危険を求めて
 愛情を増すと共にみなスポイルされたのだ
 何故だって？ 小さな一変^さった一老人、が
 胸もとまで裂けたシャツをきて、馬車を馭すべく来ていたから

Souvaroff は 純粋なプロである。バイロン時代よりも 現代、より一般的
 となってきた、プロ的性格で、執行機能のみをもち、人間的モラル、いや人間
 的野望は具備せず、動物的、活力的要素のみに歸した靈の権化なのである。価
 値判断と人間的情緒は除去されてしまった、職業軍人である。闇^{まつくらやみ}の絶頂期
 (眞暗闇)を司る長官であり、おそらく 莫大な 軍事的権限を二重、三重に
 倍加されて持つ。

Souvaroff は 偉大な人間であるが、the excutive machine^{執 行 的 機 械} であり、Nap-
 oleon、そして Wellington のもつ如き指揮権はもたぬ。勲章はもたず、身の
 飾りは一切なく いずれの側にもくみせず、ただ 能力、権能のみは備わる。

彼は彼の軍隊を 軍曹 (sergeant) の如く、あるときは、小佐 (major) の如
 く 訓練する ——それは バイロンが ミソロンギで土民軍を操縦し 訓練
 することになったのと同じである。

Souvaroff の単純 素朴さは 一種の崩壊 分裂 瓦解に終る、又、それに
 由来するものなので——多くの人間が多年にわたって なめらかな亀の甲羅と
 して形造られた 人格の 諸の要素のもつ、ある種の分裂に終る性格的ものな
 のである。

Suwarrow chiefly was on the alert,
 Surveying, drilling, ordering, jesting, pondering;
 For the man was, we safely may assert,
 A thing to wonder at beyond most wondering;
 Hero, buffoon, half-demon, and half-dirt,
 Praying, instructing, desolating, plundering—
 Now Mars, now Momus—and when bent to storm
 A fortress, Harlequin in uniform. (VII, 1v)

スワロウは 特に 油断なく
 観察し訓練し 命じ 沈思する
 人間はそう言って よかろうが
 驚異の念を遙かに凌ぐ^{しのぐ}凝い深い存在。
 英雄、道化者、半ば悪魔、半ば^{あくた} 芥
 祈り、教へ荒廃しつつ 略奪しつつ
 あるとき火星 あるときマ^{あざけりの神} モ スとなり
 とりで 塞を荒すとき 制服の道化役となる

これは Lear の‘不適應な人間’と酷似する。^{スワロウ}Souvaroff は 純粋な機械、
 権力にかしづくべく 強力な^{しもべ}下僕、黒人宦官の戦場、トルコ後宮のエピソード
 の黒人の^{こびと}小人の中へと突き出された人物なのである。これは チェスの皇帝
 ゲームなのである。最も強力なチェスの駒は 攻撃し、防禦し、威嚇し、自
 らを 他を犠牲にしながらけん制しながら力を倍加する役を演ずる。

Souvaroff は 彼の軍事的機能の点のみで、存在するのである——彼が私生
 活をもつものとして考えることはできない。彼は、ただ 事を執行するのみ
 である。そのような存在として バイロンは 明かに 彼に興味を抱いたので
 ある。というのは バイロンは たえず 人間性の両極端を見守っていたか

ら。そしてここでも亦、‘extremes meet’ ‘両極端が鉢合せする’。彼のスワロウの軍事的機械としての非人間性が奇妙に彼の組織者としての実際的人間性と渾然として溶け合っている。彼スワロウにはサド的なところはこれっぽちもない。ジュアンとジョンソンが後宮から逃れるのを手伝った二人のトルコ女性にとって、もし軍事的目標が危くされないとすれば、この二人の女性に彼スワロウはものわかりよく丁重であつたであろうのに。

二人は導かれ あらゆる世話のもとに、
注視に晒されたが 無事 馬車に連れこまれ
そこで二人だけ 事実 助かった

だがしかし スワロウには結局は細かな格別の同情には欠けていた。いやもつことが許されていなかったのである。

二人の女性のすすり泣きが 聞えてきても
彼には このこえは なんでもなかったのか？
それは どうでもよかった、何でもなかった (VII, lxxvii)

冒頭の数篇のカントウの love-interest (愛の問題への興味、関心) は、このテーマが、戦争とという謂うなれば泥沼的苦境の中で水攻めにあっているのである。

愛
Byron にとって love とは 何であつたのだろうか？

Byron は ジュアン を代弁者として みずから 愛に翻弄された数奇な運命を 紅皿を絞りながら 訴える。

バイロンにとって＜愛は命！＞^{いのち} だったのである。英国最古の由緒ある名門貴族として生をうけ、‘愛’の血を伝承し、女性から愛されるべき美貌を賦与され、先天的に、既に幼少期あまたの恋を知った！幼くして愛のいのちよりも尊い存在なることを知った。＜愛こそわが命＞^{いのち} この命題 thesis がしっかりと脳裏に刻印されて36才の生涯を走った。失恋に弄^{もてあそば}れそしてギリシアへの愛に殉じた。

Byron is poor! かわいそうなバイロンよ！Baby Byron に対して姉オーガスタの投げたことばは端的にバイロンの生き態^{さま}を物語る。＜Byron と女性遍歴＞はその華麗さゆえに世人はこれを、スキャンダラスなものとして興味深く語る。バイロン自身はドン・ジュアンをしてはっきりと告白させる。

「私は 女性の犠牲者 であった ！」

バイロンは生れながらにして幼少期より終生運命に翻弄された。運命のままに生きた。そしてそれはつねに夢幻に遊ぶが如き華麗なセラグリオ scraglio での女性遍歴の相でもあった。女性はバイロンに仕掛けたのでありバイロンが仕掛人でなくつねに仕掛けられたのである。スペインの貴族ドン・ジュアンは生れながらにして多くの女性に見守られ手厚く庇護されて育ちゆく、そこに女性との出合いは始まりそのようにそれゆえにバイロンとその影なる女性とは表裏一体として進展してゆく。

バイロンと女性、ジュアンと女性、それを切り離すことはできぬ。バイロンの場合、——女性遍歴——ということばはあたらない。不当である。ドン・ジュアンにくっきりと描き出されたバイロンの自画像、それはバイロンと愛のテーマを切々と訴えるものである。ジュアンは述懐す

る。

「男は 女の所有物の一つ である」と

みずからの いのちを賭けた イズメールの攻囲戦の さ中であって、あの弾丸の雨、あられと とび交う中で、セラグリオから 同道してきた、自分の いのちを護ってくれた美しい、二人のトルコ女性に対し、必死のおもいで脱出させ救助する。 そんな急場に、窮地にあつての バイロンの女性愛は 生れながらの習性として^{はぐく}育まれてきたもので バイロンの体臭から 消えることはなかった。 その異性への愛が 止揚され やがて ギリシアへの愛、民族を超えた愛、コスモポリタン としての愛 へと、さらに——暴君的存在への戦のみを例外として——戦は絶対あつてはならぬ、根っ子まで破壊する、全く無意味な戦に抗議する非戦論、へと昇華され、^{あたたか} 滋 い 人類愛へと、万人の平和を希求する大いなる、寛大な愛へと ^{止 揚} aufheben されたのである。

この ドン・ジュアンの^{くだ}条りに観る、バイロンの〈イズメールの攻囲戦〉の中で血涙をふり絞って 訴えるものは 何であるのか？

〈知—カー愛〉の 相関図であり、就中、愛の尊さ、である。

〈バイロンと 愛〉、すべてのものを排除しても 知に、力に 抗しても 愛は、太古より 消えなかった愛は 守らねばならぬ と バイロンは 応える。それがバイロン文学の光であり、愛のために 愛を遵守するため 知と力が存在しなければならぬとして、愛の根源^{きん}を探りゆく、ジュアンは求道者なのである。

——（続、次号へ）——